

食べた。中には友人のものまで取って食べるような餓鬼道に陥った者も出てきた。同じ境遇の中にいるすべての者は、濃淡はあれ、みんな餓鬼と化して、人間の悪い底辺をさらけ出す。体がむくみ、下痢、やせて皮膚が荒れ、これが栄養失調の順序で、飢えと疲労で倒れ、苦痛を感じる神経さえも失われ、眠るように死んでゆく。

たまにソ連軍医の診断があつたが、額に手を当てて「チンピラトールニャート（熱がない）」後ろを向かせ肉の多い臀部にさわり「ミアサムノーガ（肉が多い）」「ハラショー（上等）」と言つて作業に出される。四十度に近い熱がなければ到底作業を休むことは許されない。頼れる者のいないシベリアの地では、何もかも自分で身を守らねばならない、ごみ捨て場から動物の骨を拾ひ収容所のペーチカで真っ黒に焼き、粉にして飲む。これが私たちの手に得られる下痢の最高の特效薬であつた。運よく特效薬で下痢がとまれば幸いであるが、とまらなければ体が衰弱してやがては眠るように死んでゆく。東北の人ではなかつたが、私の隣にい

た人が夜知らぬ間に死んでいた。枕を並べていた彼に最後のお世話も許されず、追い出されるように作業に出され、帰って見ると、遺体はどこに運ばれたのか、手際よく片づけられて、荒板の寝場所が一人分空いていた。

私の抑留前後

新潟県 白鳥 侃 児

昭和十四年十二月、現役兵として私は郷里新潟県新発田歩兵連隊へ入営。中支戦線で、宜昌、長沙、江北、江南作戦等に参加後帰還。（十八年九月）十九年五月新京の兄の友人福平実さんの世話で孟家屯（南新の次の駅）の満州第三七六部隊（関東軍経理部新京第一出張所）へ雇員として就職、単身内地より赴任、自動車整備工場で部品の出納や修理の手伝い等をやる。

二十年五月郷里の母が亡くなり、兄が葬儀に帰国した際、私の嫁としてついで子を連れて帰郷。ついで子

ばらく新京祝町の兄宅で暮らす。六月上旬に到着してから家族官舎を願ひ出たり、休日には二人で児玉公園などを散歩して、結婚式の準備を兄夫婦と相談。他方私は同じ経理部出張所のハルビン四三五部隊へ自動車の出張修理に行った。

つい子が到着してから一か月余りも過ぎた七月中旬兄へ召集令状がきて、兄の送別会と私たちの結婚披露宴が兄宅で行われた。つい子をすぐ孟家屯へ呼ぶと残った兄嫁とその長女は、急に人数が半減して寂しかろうと、さらについ子を兄の留守宅に待機させているうち、八月九日ソ連参戦。

電話して自動車班よりトラックで迎えに行ってもらったのが十日夕刻。

倉庫にあった非常用の「いすず」の新車トラック三十五台の整備で整備科は、それこそ戦場のような騒ぎで私は手が離せなかった。徹夜の作業でその夜は官舎へ帰れず、翌十一日夜十一時ころ灯火管制で真っ暗やみの中、官舎へ帰った。これがつい子と一緒に官舎に泊まった最初で最後の一夜であった。

十二日は帰れず、十三日は家族の疎開で、つい子は官舎に三泊しただけで出発して行った。

私は残留組で、西谷部隊長以下の主力は十八日孟家屯の部隊を出発、先発の疎開部隊を目指して追及、朝陽鎮にてようやく合流、満浦鎮より鮮満国境を越えて平壤到着。武装解除後公会堂へ入り、四、五日でここを追ひ出されて、大同大橋近くの華頂寺へ入った。

この華頂寺で男は市の上水道工事の使役、昼食は本人だけの給食。賃金なし。

この華頂寺での生活が三合里収容所へ行くまでの私たちの新婚生活・畳一枚に二人とすし詰め状態、共同炊事。

十一月十四日保安隊（警察）より旧軍人軍属は出頭せよと、翌朝寺を後に集合場所へ、いよいよ隊列を組んで私は三合里収容所へ向かつて行進する。しかし、これが妻つい子との今生の別れとなった。

三合里は一週間ほどで平壤の駅へ向かう途中、三七六部隊の女の方二、三人に会ったが、つい子の顔をついに再び見ることはなかった。

つ子は翌二十一年五月二十三日、平壤病院にて病死した。在世二十二年二月と余りにも短い一生であった。軍属の妻になるため満州まで来て、幸福な家庭を夢見ておったであろうに、わずか二月ほどで敗戦、一転言語に絶する辛酸の果て、ついに異国の地に倒れたことを思うと、余りにも哀れである。私が抑留されず一緒に死なずに済んだのでなかろうか。つ子の死んだときは私はもうシベリアにおった。

平壤郊外の竜山墓地へ埋葬され、遺髪のみ生家へ届けられた。

三合里へ入って逃亡防止に陸軍の夏服に着替えさせられ、下着に毛糸か厚地のシャツとズボン下を許された。

飲み水がなく次第に便秘になって、便所へ行っても三十分、一時間と帰ってこれない、実につらかった。飲み水もないくらいだから用便後の手洗いもしないで、食事当番が近くに散乱する紋服や背広の布で手を拭いてお握りをつくり、魚粉をまぶして配るのだから、不衛生この上なしという状態であった。それでも一週

間ほどの滞在で済み大助かり。

次の延吉收容所は当時、一万人ほど收容。月に千人ほど死亡と言われ、十一月末と緯度も北上して本格的な寒さであった。作業はほとんどまき取りで、旧日本軍の兵舎、官舎、飛行場の格納庫を壊して、燃える木材を收容所の暖房用、炊事用、一部近くにあった病院（六四六部隊）へ毎日運んだが、安全な場所ではまきは取れず、危険な作業で死者も出た。また服装も夏服に戦闘帽、靴は夏の編上靴で、防寒帽や外套もなく、タオルではお被りやスキー帽のように垂れをつけたが、ソ連兵が番をしている営門前に集合したときは、足踏みしていなければ寒くて寒くてどう仕様もなかった。全抑留期間中このときが最も防寒具の不足したときであった。

二十一年一月末か二月に防寒帽と外套をもらった。月に千人も死んだ人の物が回ってきたらしい。三合里のように水には困らなかった。

關特演兵舎といわれる半地下式の木造平屋建て二段床式であったので、井戸が完備しておったが、こども

食事は劣等でひどいものを食わされた。たくわん漬けか肥料にする米ぬかをだんごにして、油を敷いた鉄板の上で焼いたものを食べさせられたが、とてもにがくて食べる人はなかった。またコウリヤンの外側の粉ふすまも同じくだんごにして食べた。渋く余計食べると便秘になった。

四月上旬延吉を出発、汽車で琿春まで行ったのであるがと思うが、今ではよく思い出せない。クラスキーへ。一番最初に目についたのは、大きな材木を組み合わせてつくった建物と、満州、北朝鮮から運んだ鉄道のレールの量であった。

クラスキーから作業大隊千人（四個中隊編成）が建物一つない山間のやぶの中。アルキセーフへ、当日野宿。幸い雨はなく、翌日から支給されたピラー（鋸）とタポール（斧）であたりの木を切って宿舍づくり。

屋根に木の葉の多いものを乗せたが、後日雨降りに漏って漏ってずぶぬれになり、夜など一睡もできなかった。二十か三十もつくった小屋の中に、屋根に泥を塗ったのが雨漏りがなく、次第に泥を塗るようになって

た。

何としても周囲がから空きで、夜風が吹き込んで寒くて仕方がなかった。よく住居もできないのに、作業に引つ張り出された。

送電用の鉄塔を建てるため、一直線に伐採をする。

次に鉄塔を上と下に二分したものを自動車に積んでくるので、山の中を自動車を通れるよう道路をつくった。

鉄塔を現場で上下を組み合わせ、基礎のボルトに蝶番をセットして、ロープを長く中間に柱を立て、トラクターで引いて鉄塔を立てた。

最初の山へ入ってから十日くらいで、れんが工場へ二十人ほど行くことになり私も同行した。昼と夜の交代もあったが、八時間労働だったようである。

天幕生活で、電灯もあった。山の掘っ立て小屋と比べれば、雨と隙ま風の心配はなかった。ロバート（スコップ）に二メートルの長い柄を付けて、トロッコへ粘土を積んだ。

ミキサの出口より出てくる粘土をピアノ線で切つて、四枚ずつ両手で側面より取るのは重労働で、腕力

のない日本人にはつらかった。やわらかくないので無理のできない作業である。これを乾燥用の棚へトロツコで運び、乾燥したものは炉へ、焼き上がったものは一輪車で運んだが、木と板（五センチ厚）の車台に鋳物でベヤリングのない車輪で、空でも随分重かった。

一か月くらいでれんが工場から元の隊へ戻った。

九月ころだったと思うが、収容所の近くで道路修理をしておったが、どうも体のぐあいが悪く、休んでいゝうちに熱が出てきて、気がついたときは若い兵隊に起こされてからだだった。歩くこともできなくて、その人に背負われて収容所へ帰った。現役兵で中支戦線におったとき、マラリヤにかかったことが再発したらしく、なかなか熱が下らない。

腹のぐあいも悪く下痢となり、薬もなく日本人軍医の指導でたき火をしたときの消炭を粉にして、手に山盛りほどの量を飲んだ。炭素で水分を吸収しようといふわけだが、量が多いので大変苦勞して飲んでも治らない。そのうち腸に傷がついたのか、血が混じり、赤痢にならないうちにと入院することになった。

延吉より一緒に入ソした人々と別れて、他にも五、六人一緒に病院へ。トラックに乗せられて二時間くらいのアキヤンスクという町で、ウラジオストックより海岸線がずっとこの辺まで大きく湾になっていた。

病院の食事は全かゆのほか副食が少し、何としても量的に少ない。スープスプンに二杯くらいの量だから、二時間もすれば空腹を感じるほど。

下痢で入院したのに三日間で治り、一か月もおらないで退院することになり、何人かトラックに乗せられて、着いた収容所はフタロイレイチカ（第二の河の意）で、延吉より同行した前の部隊へは帰らなかった。しかし私は、入院前の山の掘つ立て小屋より古い建物ではあったが、屋根も外側も完備して電灯もありうれしかった。前の部隊も、この三七六部隊の知人は他に一人もおらなかったのである。

一個小隊くらい六、七十人で建築関係の作業をしており、私は特技もないので雑役であった。

中隊本部はラストニヤにあるといっておったが、現在地図を見てラストリノエであらう。

この作業の間によく駅へ原木やれんがが到着して、一日の作業が終わって疲れと空腹で収容所へ帰ったのに、夕食を見ながら空腹で再び作業に行くのがつらく、ほとんど残業の夜間作業であった。

このときは一人でも怠ける者はなく、原木おろしなど、わきに櫓として立っておる丸太を根元から鋸で切って崩し、一気に片づける危険な方法が取られ、崩れ落ちる原木に挟まれて命を落とした人もあった。そして『カンチャイネエト、クーシヤイネエト。』（終わらないと飯を食わせないぞ）の罵声も捕虜の境遇では、ただ黙って悔し涙を耐えて作業を続けるはかなかった。

二十四年十月三十日、信洋丸で舞鶴上陸。帰郷するも妻の元気な出迎えはなく、このときになって初めて平壤での死亡を知った。

興安嶺からウラルを越えて

岩手県 西 富一郎

興安嶺を踏破して音徳爾到着まで終戦を知らずに、激闘を繰り返しながら後退転進中の我が第百七師団は、日の丸標識をつけた飛行機飛来により停戦を知り、この地で武装解除となった。（八月二十九日）

自由なき生活が始まる。興安の河岸まで疲れと空腹に耐えながら強行軍。興安で野宿したが、夏物衣服のため寒かった。翌日も行軍させられて、徳伯斯（トボス）に到着。食糧の配給もないので極力代物を求めに努めたが、警戒兵の監視が厳しく、射殺されるので空腹の日々を送り、チチハルへ移動して、作業大隊が編成された。

昭和二十年十月二十七日、満州最北端の満州里よりソ連領内に向け、貨物列車に乗せられ初冬の夕暮れ発進。スピードを出して走る。暗やみがやってくる。車